

曳縄釣（中層）漁業技術の開発と省力機の導入 （技術改良試験への参加協力）

伊 礼 勇 雄

1. はじめに

専技の技術改良試験への参加協力と云うことで中層曳の漁具、漁法を試み併せてこの漁具、漁法の省力化のための巻揚機（ハマリール）を導入した。（漁具図については専技報告書参照）

2. 目 的

最近、底魚資源の減少が著しく目立ち、将来有望視される資源は、中表層の回遊魚（カツオ、マグロ、サワラ）であり、これらの魚種を釣獲する漁法として浜口計器工業株式会社で開発された漁具、漁法を使用してみた。

3. 試験概要

- (1) 実施漁場 久米島沖、粟国沖（水深800m）
- (2) 実施期間 昭和57年7月19日～7月25日
昭和57年11月4日～11月6日
- (3) 使用漁船 元海丸（上原元）2.90 吨、くろしお（水試）34.82 吨
- (4) 協力機関 久米島漁協、水試

久米島沖での試験については専技の報告書で詳細されており、今回の報告書は粟国沖漁場について述べる。水試の調査船（くろしお）に乗船し、浮魚礁周辺の調査も兼ねながら実施した。

この漁具、漁法の操業方法は、まず最初に鉛玉からゆっくりおろし15m間隔のスナップ掛け（チップ）に技縄（擬餌針）を5本から9本付け、曳縄角度30°にし速度は3マイル～4マイルの速さで30分から40分間曳いてみた。この様な操業方法で何回も試みたが釣獲がなかったので船の速度を5マイルから6マイルにしたり、又技縄を長くし（30m）鉛玉の後からとったりしたが成果は上がらなかった。

5. 結 果

内地で開発されたこの漁具、漁法を現地で改良せず適応化したことが失敗の原因である。しかし、省力化機器については、この様な労力を必要とする漁具、漁法にはある一定の成果はあったものの今後は操作方法の指導や小型漁船にも設置できるよう改良工夫する必要がある。

6. 今後の課題（改良）

今後の漁具、漁法の改良点として(1)技縄の長さの調整や擬餌針の改良(2)幹縄ワイヤー（ステン）の改良(3)鉛玉（沈子）重量の調整や改良(4)船速の調整などがあげられるが本県の様な透明度の高い海域ではこれらと大いに関連する。

- (1) については、特に透明度の関係から幹縄からの技縄を長くし擬餌の色も変化する。（やや赤味かかった物が多い）

(2) については、現在の幹縄はステンワイヤー（2.5mm）であるがため曳縄時の潮流の抵抗と音が高くしかもステンワイヤーによる反射があり魚が驚く可能性が多々あるのでナイロン（200号）による改良が考えられる。

(3) についても同様で潮流の抵抗により音があり、しかも重量があるので、曳縄時の釣獲感がなく、操業中あまりにも労力のウエイトが高いため潜行板による改良が必要である。

(4) については、本県の曳縄漁業はだいたい5マイル～6マイルの船速であり、これに順応するよう対処したい。

以上の様に改良工夫するところは改良し、漁具全体の規模なども考慮しながら昭和58年度へ向け継続したい。